

日立鉱山と日立製作所の創業者 久原房之助翁の事績を訪ねて

〈取材先〉 日鉱記念館（茨城県日立市宮田町3585）

■父祖の地

日立鉱山（現JX金属）の創業者・久原房之助の父祖の地は、山口県萩城下の北東約10キロ、須佐湾に面した須佐という漁業と農業の町である。長州藩の家老・益田氏の領地で、久原家の祖先はこの地で代々農業を営んできた。房之助の祖父・久原半平の時代に士分に取り立てられ、半平はさらに村役人を務め、益田氏の金融を預かる御用商人になった。しかし、1863（文久3）年、半平は何者かによって暗殺される。御用商人としての勢力の伸長が、益田家にとって許容しがたいレベルにまで達したため…といわれ、半平の死後、益田家は「士分でありながら、無腰であったことは不覚悟である。よって士籍及びお役目剥奪」という冷酷な通達を下した。

半平は生前、義兄・田村金右衛門の次女・文子を養女として迎え、藤田半右衛門の次男・庄三郎とめあわせており、半平の跡目は庄三郎が相続し、夫婦は須佐を離れ

て萩城下に移り住み、そこで造り酒屋をはじめた。1869（明治2）年、この庄三郎と妻・文子の四男として生まれたのが久原房之助である。



久原房之助肖像

■藤田組の創設

父・庄三郎の酒造業は、しかしながら成功しなかった。1873（明治6）年、庄三郎は萩を離れ、大阪で軍靴を製造していた弟の藤田伝三郎を頼り、藤田伝三郎は、庄三郎とともに「藤田組」を起こした。「藤田組」は、西南の役（1877、明治10年）で政府軍に軍事資材を納品したり、人夫を斡旋して大きな利益を得、さらに京都—大津間の鉄道建設、滋賀と福井県境を貫く柳瀬トンネル、大阪五大橋梁工事、琵琶湖疎水工

事などの土木工事を手掛けて業績を伸ばした。庄三郎は、1879（明治12）年に、文子と房之助を呼び寄せ、一家は住まいを萩から大阪に移した。

庄三郎の弟・藤田伝三郎は、幕末の動乱期に高杉晋作に師事して奇兵隊に参加していた。そのため、元長州藩士で新政府高官の井上馨と面識があり、そんないきさつから、西南の役の後、藤田組が深刻な資金不足に陥った1885（明治18）年、藤田伝三郎と長兄の藤田鹿太郎、次兄の久原庄三郎の3人は、井上の口利きで、旧藩主の毛利家から融資を受けた。最初は20万円。その後何度か借り入れを繰り返し、融資総額は227万円にのぼった。藤田組はその資金で小坂鉱山、大森鉱山、十和田鉱山、大森銀山（石見銀山）を次々手に入れて、鉱山経営を開始した。

庄三郎の子・房之助は13歳で商法講習所（後の東京商業学校、現一橋大学）に入った。さらに慶應義塾で学び、1889（明治22）年、慶應義塾本科を卒業。その後、貿易を志して、森村市左衛門の森村組に入社した。森村組での房之助は、業務改善を提案するなど、熱心な勤務態度が評価され、ニューヨーク支店への赴任が決まっていた。しかし、藤田組顧問の立場にあった井上馨は、藤田組の業績悪化で毛利家から融資を受けた庄三郎が、実子を他社に就職させたことに激怒。ニューヨーク赴任の直前、房之助は、井上の意向で、森村組から叔父が



日鉱記念館

代表を務める藤田組に移籍させられ、1891（明治24）年、小坂鉱山への赴任を命じられた。

■小坂鉱山の採掘

小坂鉱山は十和田湖の南、秋田県鹿角郡小坂町にある。南部藩が開発し、江戸時代を通じて金・銀が採掘されてきたが、当時はほとんど掘り尽くし、銀の生産量は減少。人件費の高騰と銀価格の低迷で、鉱山経営は年々苦しくなっていた。

房之助の仕事は、鉱夫たちと一緒に現場作業に従事することからはじまって、精鉱係長、事務部長心得、現業課長と昇進し、1900（明治33）年には事務所長に就任した。同年、房之助は、井上馨の姉の孫にあたる鮎川清子と結婚している。

房之助は、土鉱と呼ばれる地層からの金・銀の採掘に見切りをつけ、新たに黒鉱と呼ばれる地層から銅を採掘する方針を固めて、必要な技術者を結集。外国の技術も取り入れて、鉱山を蘇らせようとした。さ



日立鉱山の掘削風景（日鉱記念館展示写真）

らに、従業員の就労環境を改善するために、社宅・病院などの福利厚生施設を建設する計画を立てて本社に提案した。

計画の実現のためには新たに4万円の資金が必要になる。藤田組本社にそう進言したが、藤田伝三郎の子・平太郎は、小坂鉱山は売却する方針であると主張し、房之助の提案を一蹴した。房之助はこの案を井上馨に示し、井上がこれに賛同したことから、房之助の提案が受理されて、小坂鉱山は銅生産に進出し、やがて莫大な富を生み出すようになった。同じような見直しが他の鉱山にも広げられ、この結果、傾いていた藤田組の経営は好転。毛利家からの借財の完済につながった。

このままでは、藤田組の中での房之助の発言権が、大きくなりすぎる。そのことを恐れた伝三郎は、1904（明治37）年、房之助を小坂から大阪に呼び戻すとともに、新たに藤田家の家憲を制定してみんなに言い渡した。藤田家は末弟の伝三郎を宗家とし、長兄の鹿太郎、次兄の庄三郎は傍流と位置付ける。藤田組については宗家の伝三郎一族が社長を務め、鹿太郎一族、庄三郎

一族は副社長職を世襲する…と宣言するものだった。

庄三郎はこの家憲に納得できず、房之助に家督を譲り、房之助は藤田組を離れることを決意した。伝三郎は、小坂鉱山以外の藤田組のすべての資産を自分のものとしたうえで、小坂鉱山の資産価値を1892万円と見積もり、兄弟3人に小坂鉱山の技師長で伝三郎の娘婿となった武田恭作を加えた4人で分割するという案を提示した。久原家は、小坂鉱山の資産価値の4分の1、473万円を10年の年賦で支払うという伝三郎の提案を受け入れて、藤田組と袂を分かった。1905（明治38）年のことである。

■日立鉱山の買収

1905（明治38）年、房之助は3家分立によって手にした10年年賦の473万円を全額投入して、茨城県多賀郡日立村の「赤沢銅山」を買収した。豊臣秀吉の時代に佐竹義重が開発し、その後、水戸徳川家が領有していた銅山で、日立海岸から宮田川沿い8キロ遡った山中に鉱口がある。房之助はこの「赤沢銅山」を「日立鉱山」と改名した。

鉱山の買収費に当てられた資金473万円は年賦であったために、房之助はそれを担保に鴻池財閥から融資を受けていた。鴻池は融資の条件として経営への参画を要求。その結果、鴻池から神田礼治が送り込まれ、鉱山事務所長のポストに就いた。毛利家の鉱山部門を管理していた鉱山の専門家

だった。

その神田が、1909（明治42）年、突然に「断層に突き当たった。誰が鉱床の調査をやったか知らぬが、まことに残念なことであった。この鉱山の先行きは絶望的である」と一方的に宣言し、彼は自分が連れてきた数十人の中堅技術者を引き連れて帰ってしまった。鉱山開発は、たちまちマヒ状態に陥ったが、そこに現れた救世主が、小坂鉱山時代に房之助と一緒に働いた40人だった。この40人のおかげで日立鉱山の開発は再び軌道に乗った。

■日立製作所の設立と分離独立

房之助の救援に駆けつけた40人の中に小平浪平おひらなみへいがいた。小坂鉱山時代には電気課長を務め、その後、東京電灯会社に勤務していた人物である。日立鉱山では工作課長のポストに就き、それまで輸入に頼っていた電動機や機械器具を日立鉱山の中で製作し、修理する体制を整えようとした。

機械化推進のためには電力を確保しなければならぬ。小平はそのために、鉱山の北方10キロを流れる大北川、その南の里



小平浪平肖像

川、そして鉱山の東を流れる夏井川のほとりに、計7ヵ所の水力発電所を建設。蒸気機関が主な動力源であ



日立鉱山大雄院精錬所（日鉱記念館展示写真）

った時代にはじめて、送風、用水、輸送、電灯、精錬に至るまで、すべてを電力によって賄う体制をつくり上げた。それまでの人力による採掘は電動鑿岩機さくがんに替わり、鉱石から電気銅まで一貫作業でつくり上げる工場が誕生した。

1908（明治41）年には、鉱山から海岸までのちょうど中間点に位置する大雄院に精錬所を建設し、鉱口と大雄院を索道でつないで鉱石を運び、ここで鉱石の中から不純物を取り除いて銅を取り出した。

「銅の相場は絶えず動いています。三井、三菱、古河など、鉱業の同業者がたくさんある中で、後発の我々が彼等と並んでいくには、一歩すすんだことをやらねばなりません。人よりも一歩抜きんざること、これが早くからの私の方針であります。鉱山ばかりでなく、何でもそうでなければならぬつもりでおるのです」

房之助はみんなにそう語り、その方針を全員で忠実に推進した日立鉱山は、1913（大正2）年、足尾銅山に次ぐ全国第2の産銅量を達成した。

1910（明治43）年、小平浪平は、電気機

械製作事業のための新工場建設を房之助に提案し、それが認められて宮田芝内（現日立市白根町）に敷地面積418㎡の工場を建設した。この工場が「日立製作所」と名付けられ、1920（大正9）年には、久原鉦業所から独立して資本金1000万円、従業員数2700人の株式会社となり、小平浪平が初代社長に就任した。

■日産財閥の形成

銅の産出量が上がるとともに公害問題が持ち上がった。煙害が周辺の4町12村に及び、その対策として1914（大正3）年、15万2000円の巨費を投じて、当時世界最大級の高さ36m、直径18mの巨大煙突（通称ダルマ煙突、アホ煙突）が建設された。さらに荒廃した山々に、亜硫酸ガスに強い大島桜、黒松、ヤシャブシ、ニセアカシアなどが植林された。これらによってすべての公害が解消されたわけではなかったが、久原鉦山が躍進する一助となった。



世界一高い煙突
（日鉦記念館展示写真）

らに躍進した。房之助はこの頃、日本に亡命してきた孫文を支援し、孫文の広東軍政府樹立の一助となった。



鮎川義介肖像

大戦が終息すれ

ば需要は激減する。そう考えていた房之助はパリに向かった倉林賢造に終戦の兆しがあれば「プラチナ高い」という暗号を送るように命じていた。倉林は終戦の4ヵ月前に「プラチナ高い」という電報を送ったが、それを受け取った新入社員はその意味が理解できず、報告もしなかったために、房之助は戦後不況の直撃を受け、大きな負債を抱えることになった。房之助は、困難な状況に陥った久原鉦山の経営を妻・清子の兄・鮎川義介に委ね、自分自身は経済界から引退。その後、政治の世界に転身した。

房之助から久原鉦山を引き継いだ鮎川義介は、1928（昭和3）年、久原鉦山を「日本産業株式会社」と改称。日本産業の鉦山部門を「日本鉦山」として独立させるとともに、その後、「日本産業株式会社」の傘下に日本鉦業、日立製作所、日産自動車、日産化学、日産ゴム、日本ビクター、日産火災海上などを収めた。これにより、鮎川財閥は「日産コンツェルン」と呼ばれ、三井、三菱、住友と並ぶ日本を代表する財閥として発展した。

■房之助の政界進出

1927（昭和2）年、房之助の支援を受けて軍人から政治家に転身した田中義一が内閣総理大臣に就任した。この田中内閣の下で房之助は通信大臣に就任。帝国政府特派海外経済調査員を命じられ、ドイツ、ソ連を訪問し、スターリンと会談している。

久原の財力を目当てに多くの人が集まり、やがて房之助は立憲政友会の幹事長に就任した。1936（昭和11）年には二・二六事件にかかわっていた亀川哲也に大金を渡し、その後彼をかくまった容疑で逮捕され、東京陸軍軍法会議にかけられて国会議員としての身分を失った。1939（昭和14）年には再度国会議員に復帰。立憲政友会の第8代総裁に就任し、「一国一党論」を主張した。

※本稿の執筆に当たっては次の資料を参考にしました。『惑星が行く—久原房之助伝』（古川薫著、日経B P社、2004）、Wikipedia「久原房之助」「藤田伝三郎」「藤田組」「日立鉱山」、「久原房之助の立志伝」「政界の黒幕・久原房之助の立志伝」<https://nobunaga-oda.com/kuhara-fusanosuke/>

戦後はGHQから戦争犯罪容疑者として逮捕されたが、中国の革命家・孫文を支援したことがあったために戦争犯罪人を解除されている。

1952（昭和27）年の衆議院選に出馬。83歳で国会議員に返り咲いたが、吉田茂総理のバカヤロー解散で失職。1955（昭和30）年には日中・日ソ国交回復国民会議の会長に就任した。このおかげで中国を訪問し、孫文を支援していたことを伝えて、毛沢東との会談が実現した。さらに1961（昭和36）年にはソ連第一副首相・ミコヤンを自宅に招いて会談している。1965（昭和40）年、脳軟化症により97歳で死去。

途方もない力量を持ち、恒星の間を予測不能な行動をする惑星^{まよいぼし}と呼ばれた人であった。

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「仕事の事典」をネット公開中